はしがき

本書は、現代哲学における自然主義への入門書である。想定しているのはおおよそ次のような読者だ。

・哲学を学ぶ中で「自然主義」という言葉によく出会うようになってきたので、このあたりでひとつ自然主義の典型的な主張や考え方に、まとまった形で触れておきたい。
・知識、道徳、心、科学、言語、人間の本性、生まれと育ち……といった幅広い話題に多少なりとも関心がある。

これに加えて、自然主義がどのような仕方で、認識論（知識の哲学）や科学哲学、あるいは心の哲学や道徳哲学（倫理学）――さらに細かくいえば認知科学の哲学や道徳心理学――などの哲学の特定

の分野と関わっているのかを知りたい、というやや専門的な背景を備えた読者も歓迎する。

本書ではこうした読者層を想定したうえで、一冊の書籍として少しでも読み通しやすくするために、以下のような書き方の工夫をしている。

・人間の心には何が生まれつき備わっているのか、すなわち心の基本設計（あるいは人間本性）をめぐる問いを、とくに序盤から中盤までの流れを一貫させるための軸とする。

・いきなり自然主義の哲学的なハードコアを扱うよりも、身近であったり、科学的な知見が蓄積されていたりして、なるべく具体的な事例が挙げやすい領域を前の方に配置するように心がける。

・比喩を使うとイメージが喚起されて論点がつかみやすくなるとか、文で説明するよりも図表で示した方がわかりやすくなる、といった場合には、そうした道具（思考ツール）を積極的に用いるように努める。

科学との密接な結びつきは自然主義のひときわ重要な特徴なので、本書では哲学者だけでなく、心理学・認知科学などの分野の科学者にもたくさん登場してもらいながら、重要と思われる科学的知見や実験なども積極的に紹介していくことにしたい。実際、哲学者も科学者も同じように参加して繰り広げられるのが、自然主義的な色彩の濃い領域における最先端の議論の特徴だといえる。そうして自然主義が実践されている現場の近くまで読者を連れて行くのも、本書の目標のひとつである。

では、自然主義の入門ツアーとしての本書の構成を述べておこう。

・第1章では、自然主義のおおまかな輪郭を描き出したあと、心の基本設計をめぐって対立するふたつの代表的な見解――生得説と経験主義――について簡単に説明する。
・第2章と第3章では、心の働きのひとつとして道徳に焦点を絞り、その生得性に関する代表的な見解のいくつかを概観する。
・第4章と第5章では、視野を道徳から心の全体像に広げ、現代の生得説と経験主義がそれについてどのような見方を提出しているかを整理する。
・第6章では、ここまでの議論を集約することを目指して、心について現在のところ最も妥当だと思われるふたつの見方を結びつけながら、新たな人間観を描き出す。
・第7章では、主として前章で得られた見方を援用して、道徳に関する規範や道徳的進歩をめぐる問題に自然主義がどうアプローチするのかを示す。
・第8章では、懐疑論への応答を中心に、認識論の伝統的な課題に自然主義がどのように取り組むかを論じる。
・第9章では、あらためて自然主義がどのような哲学なのかを整理するとともに、自然主義にとって哲学とは何なのかを考察する。

第2章から第6章くらいまでが、人間の心は実際にどのようなもの「である」のかに迫る、という意味で、事実に関わる記述的な問題を扱っている。自然主義は科学と連続的な営みとして哲学を捉え

るだけに、こうした事実的な問題は総じて得意と見なされている。これに対し、しばしば自然主義は、道徳や認識はこうある「べき」だ、という価値に関わる規範的な問題は苦手といわれる。そのような見方から生じる懸念を払拭するのが、第7章と第8章の狙いのひとつである。最後の第9章では、しめくくりの章として、自然主義および哲学そのものを考察の対象として取り上げる。

いうまでもないことだが、本書はあくまでも自然主義の入門ツアーのひとつを試みたものであって、水も漏らさぬ完全ガイドを目指したものではない。現在まさに領域の拡大と議論の深化を続けている自然主義の全貌を捉え尽くすことは、いかなる手段をもってしても、もとより不可能であろう。しかしそうした理由のほかに、入門書という性格のゆえに、また一冊の書籍としてひとまとまりの流れをもたせるために――あるいは単に筆者の力が及ばなかったせいで――本文中で十分な形では扱えなかった話題はそれなりにあるし、また自然主義に関わる重要な論点がいくつも欠落することとなった。そうした点についてはコラムで少しだけ解説を補ったが、さらに詳しい議論や発展的な内容について知りたい読者は文献案内で紹介している書籍や論文へと進んでほしい。

それでは、自然主義の海へと漕ぎ出そう。――いや、すでにその航海の途上にいることに、まもなく気がつくことだろう。